

## 肥効調節型被覆肥料を用いた裸麦「イチバンボシ」の栽培法

山戸陸也・橋口昭彦<sup>1)</sup>(熊本県農業研究センター球磨農業研究所・<sup>1)</sup>阿蘇農業改良普及センター)Michiya YAMATO and Akihiko HASHIGUCHI :  
Cultivation Methods of Controlled Release Fertilizer for Naked Barley "Ichibanboshi"

裸麦「イチバンボシ」の省力的かつ安定多収の栽培法を確立することを目的として、播種量と肥効調節型被覆肥料を用いた施肥法について検討を行い、簡単な経営評価を行った。

## 1. 材料および方法

- 1) 試験年次：1996～1998年（播種年）
- 2) 試験場所：球磨郡上村球磨農業研究所
- 3) 土壌条件：表層多腐植質多湿黒ボク土
- 4) 供試品種：イチバンボシ
- 5) 試験区面積，区制：10m<sup>2</sup>，2区制
- 6) 試験区の構成：第1表参照
- 7) 播種日：11月20日
- 8) 栽培管理：踏圧2回，土入れ1回，追肥（2月中旬）
- 9) 経営評価：熊本県農業経営指標の数値を参考にして試算を行った。

## 2. 結果および考察

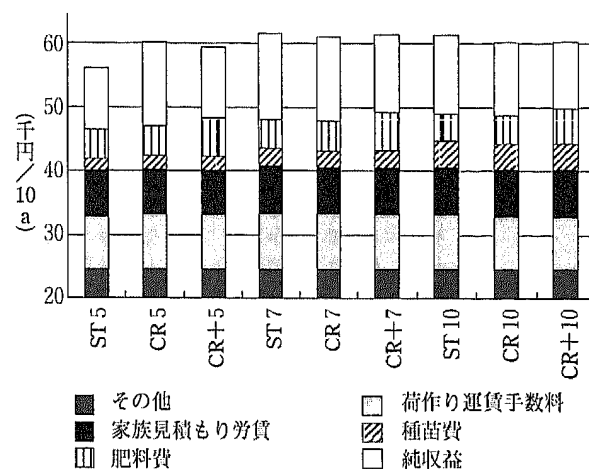
苗立ち数および最高茎数は播種量が多くなるほど多かった。播種量が同じ場合，肥効調節型被覆肥料を同量施用した区では，標準施肥に比べて穂数が少なくなる傾向が認められた。

収量は，標準施肥で0.7kg播種した区が最も多く，いずれの施肥法でも0.7kg播種で収量が多くなった。

肥効調節型被覆肥料を施用した区は播種量が少ない区では標準施肥より増収するが，播種量が多くなると逆に収量は低下した。また，施肥量の増加も収量の増加にはつながらず，肥効調節型被覆肥料の施肥量は窒素成分で標準施肥と同量で良いと考えられた。

経営評価の結果，粗収益は収量の多かった播種量が0.7kgのすべての区，および標準施肥で1.0kg播種の区が高くなった。しかし，肥効調節型被覆肥料を使用した区で肥料代，播種量が多い区で種子代，追肥を行った区で家族見積もり労賃が高くなり，農業所得から家族見積もり労賃を差し引いた純収益は0.7kg播種で標準施肥の区が最も高く，播種量が0.5kgまたは0.7kgで肥効調節型被覆肥料を同量施用した区がそれに続いた。

このことから，肥効調節型被覆肥料の全量基肥施用は実用可能であると考えられた。



第1図 経営評価

注) 試験区名でSTが付く区は化成肥料の分施，CRが付く区は緩効率40%畑地での窒素溶出が85日の肥効調節型被覆肥料を全量基肥施用，+はその増施，数値は播種量 (kg/10a) を表す

第1表 生育・収量調査結果 (3年間の平均)

試験区名	播種量 (kg/a)	施肥法 (基肥-追肥)	苗立ち数 (本/m <sup>2</sup> )	最高茎数 (本/m <sup>2</sup> )	稈長 (cm)	穂長 (cm)	穂数 (本/m <sup>2</sup> )	収量 (kg/a)	倒伏程度
ST 5	0.5	0.5-0.2	126	838	83	5.5	499	40.0	1.0
CR 5	0.5	0.7-0.0	123	836	83	5.4	486	42.9	0.9
CR+5	0.5	0.9-0.0	124	924	83	5.4	524	42.4	1.4
ST 7	0.7	0.5-0.2	152	973	84	5.4	548	44.0	1.5
CR 7	0.7	0.7-0.0	153	987	83	5.4	531	43.5	1.9
CR+7	0.7	0.9-0.0	154	1022	83	5.5	582	43.8	2.2
ST 10	1.0	0.5-0.2	224	1174	84	5.3	623	43.8	2.4
CR 10	1.0	0.7-0.0	217	1133	83	5.4	576	43.1	2.1
CR+10	1.0	0.9-0.0	199	1209	82	5.3	608	43.0	2.1

注) a) 試験区名でSTが付く区は化成肥料の分施，CRが付く区は緩効率40%畑地での窒素溶出が85日の肥効調節型被覆肥料を全量基肥施用，+はその増施，数値は播種量 (kg/10a) を表す

b) 施肥法は窒素成分量 (kg/a) で示す